

## チェルノブイリの祈り

ベラルーシでチェルノブイリ事故の除染作業に関わった消防士や汚染地に暮らす人々から聞き取りをし記録した「チェルノブイリの祈り」の著者スベトラーナ・アレクシエービッチさんが来日され、国内のチェルノブイリ支援団体が連携し合って、全国で講演会が開かれました。

JCFは10月15日、松本市あがたの森文化会館講堂でJCFセミナー「チェルノブイリの祈り」を開催しました。

第一部は、アレクシエービッチさんとJCF理事長鎌田實のトーク、第二部は神田香織さんの語る講談「チェルノブイリの祈り」というプログラムのセミナーには、平日の夜にもかかわらず、280人を越す参加者で満員の盛況となり、たくさんの反響をいただきました。またこのイベントには松本市内三校の高校生が準備会から運営に参加して、当日も多数の高校生が熱心に耳を傾け、感想を寄せてくれました。

このセミナーの様子を報告いたします。

僕たちにとって、遠い国ベラルーシ。1986年に起こったチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故で、人々は幸せの感覚を失った。「子ども達が、白血病で苦しんでいる。日本の進んだ医療で何とかして欲しい」との依頼を受け、チェルノブイリに向かったのは、1991年1月だった。

ロシア・ウクライナ・ベラルーシを回りながら、事故直後の除染作業に動員された兵士や消防士の多くが苦しんでいる、と聞いた。原発周辺30キロ圏内はゾーンと呼ばれ、住民は強制移住させられた。汚染は南風によって、白いロシアと呼ばれるベラルーシ共和国に広がった。原発から200キロ離れた地域にも、風で運ばれた放射性物質がフォールアウトし、移住勧告の後、地図から消されていった『埋葬の村』がある。

病院や医療センターに行くと「日本に、子どもを連れて行ってほしい。日

本の医療で治してほしい」と、付き添うお母さんやおばあさんが訴えてきた。

JCF/日本チェルノブイリ連帯基金は、日本中のたくさんの方々への応援を得て、最も汚染のひどかったベラルーシ、ゴメリ州の子ども達の甲状腺健診・白血病治療、そして小さなボレーシエ学校の健康診断に取り組んできた。子どもに付き添い、日々の生活と闘う家族の皆さんと会うとき、この地には、つましく素朴な暮らしをつないできた何百万の人々がいる、と気が付かされる。

スベトラーナ・アレクシエービッチさんは、名も無き市井の人々の声を丁寧しぜいに聞き取り、まとめられた。それが「チェルノブイリの祈り」です。

無念の死を遂げた消防士の妻の悲痛の叫びが聞こえてきました。埋葬の村で隣人の安否を問いかけてくるサマシヨールがいました。汚染の村を去れ

ず、住んではいけない危険な地帯に居座るサマシヨールはわがままな人だと聞かされました。皆、心を寄せ合って、暮らしていたのです。

彼らのつらい記憶に耳を傾けたスベトラーナさんとは、どんな方なのでしょうか。

彼女の別の著書の扉にこんな言葉を見つけました。「たとえ子どもであろうとも、かれらの犠牲の上に社会の繁栄があつてはならない。ドストエフスキー」。私たちは、初めてチェルノブイリの被災地を訪ねた時、ソ連科学アカデミーの教授が語った言葉を忘れることができませぬ。「一粒の子ども

の涙は、全人類の悲しみより重い、いま、チェルノブイリの子ども達が泣いています。私たちだけでは救えない。日本の人たちに期待しています」奇しくも同じ言葉に、心を揺さぶられ、チェルノブイリに関わり続けてきまし

原子力発電所開発史上最大と言われる大事故が、そこに住む一人ひとりの人間にとって、どんなに辛いものだったのか。汚染の数値だけではわかりません。病気の発症数だけでもイメージできない。生きた情感を共に受け取ることが、今を知り、記憶を未来への想像に向かわせるエネルギーに変えていくでしょう。

13年間の支援・協力活動を通して、私たちは、チェルノブイリの悲しみを学んできました。救援活動をしながら、自然・環境・命・家族・人間の絆等たくさんのことを学ばせてもらいました。ぼくらは、これから僕らの住む地球を大切にしていきたいと思ひます。子ども達のために地球を大事にしたいと思ひます。

(JCF理事長・鎌田 實)